

## 事例2 大阪府教育センター附属高校

# メタ認知能力と自己調整能力の育成を目指し、振り返りを重視した指導を全校で実施

大阪府教育センター附属高校は、2017年度、「クローバープラン」で既存の教育活動を整理し、育成を目指す資質・能力を教員間で共有した。その中でもメタ認知能力と自己調整能力の育成に焦点をあて、ポートフォリオの活用や授業での振り返りを強化してきた。教科・科目を超えた授業研究などを進める過程で、学校教育活動全体のPDCAサイクルが回り始めている。

### Plan 「クローバープラン」で育成 を目指す資質・能力を共有

大阪府の教育を牽引するナビゲーター「シヨンスクール」として2017年度に開校した大阪府教育センター附属高校は、大阪府教育センターの研究・研鑽機能と一体となった教育活動を展開する公立高校の1校。開校以来、「東北の新しい社会の中で、個性を磨かずに生き抜く子どもたちを育てる学校」を目指す学校像に掲げている。

16年度には、文部科学省「高校生  
の基礎学力の定着に向けた学習改  
善のための調査研究事業」（3年度）

の指を受け、カリキュラム・マネジメントの実践、PDCAサイクルに基づいた学校改革に着手。各教科・科目で、パフォーマンス課題の実践やアクティブ・ラーニングの観点からの授業改善などに取り組んだ。

17年度は、学校教育活動全体のPDCAサイクルの確立に動き出した。まず、教科・科目を超えて教育目標の共有を進めるため、「クローバープラン」を作成した。それは、既存の教育活動を「誰かを学ぶ力の育成」「探究力の育成」「キャリア教育の実践」「自己表現を叶える為のサポート」の4つに整理し、目指す学校像と照らし合わせて、それぞれの教育

活動で育成する資質・能力を示したものだ（図1）。その中で、特に育成を目指す資質・能力として掲げたのが、「メタ認知能力」と「自己調整能力」である。宮田早希子教頭は、実は次のように語る。

「生徒自身が目標を持ち、その実現に向かって努力する姿勢を力をもまない限り、基礎学力の定着や応用力等の育成は難しいでしょう。生徒が自分の学力を客観的に見て課題を把握し、自ら改善していく力を育むことが最大の目標だと捉えました」

その上で、カリキュラム・マネジメントについて理解を深めるためのワークショップを実施。学年間で

は「学年目標」と「育てたい力」を、各教科では「科目の目標、つけた力」を設定し、全学年、全教科、科目を共通した「年間指導計画一覽表」を作成した。宮田早希子教頭は、その意義を次のように説明する。

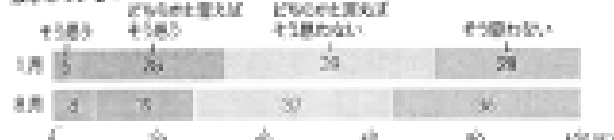
「年間指導計画一覽表」により、時期ごとの各教科・科目の内容及び育成を目指す資質・能力が一覧で見られるようになりました。教科内で指導計画を立てる際も、他教科との連携を考えた上、重複している部分は精選したりと、他教科との連携を意識した計画の立案が可能になり、カリキュラム・マネジメントの第一歩となりました」





表4 「通称マップ」での学校オリジナル質実の1年生の割合(%)

(10) 定期考査の前や、夏休み等の休暇、あるいは部活動に際して、前項を定めて指導している。



(11) 授業の進度に平均的範囲の遅り及び早行時や、定期考査の都合など、自身の自身の取組を振り返り、次の学期に活かそうと、考えようとしている。



\*4 学校資料に基づき調査期間での状況

に理解できた」「メタ認知能力の育成の観点から高い印象を受けた」となど、活発に意見が交わされた。3学年も副担任の竹島貴之先生はこう語る。

「教材を組んだ研修会では、専門外の観点からの評価が有効でした。教科担当が見逃しや正しい改善点を把握できました」

**Action**

**共通理解が導いた今、全校でのPDCAサイクル構築を目指す**

それらの検証を踏まえ、生徒が自分で学びのPDCAサイクルを確実に回せるよう、18年度はベネッセの「スタディサポート」(※3)を導入した。1学年担任の太田幸輔先生は次のように説明する。

「生徒は、模範試験の結果に一喜一憂するだけで、学習の振り返りを十分にできていませんでした。「スタディサポート」の導入には結果が詳細に示されているので、自己調整能力の育成に効果があると考えました。実際、生徒の様子などから、自分で要点を把握し、意図しようとする生徒が増えていると感じます」

ポートフォリオは、2年生では引

き継ぎ活用し、1年生でも活用を始めた。「ADP(アクティブラーニング)」「4C」の活用も視野に入れ、より効果的な活用法を探っている。

教科指導においては、ルーブリックの質の改善を図ろうと、「ICCEモデル」(※4)の活用を始めた。既に学校設定科目の「探究ナビ」では、生徒に自身の活動を振り返らせ、どの段階の学びが達成できているのか「ICCEルーブリック」で測っていた。「探究ナビ」は1〜3年次で系統的に教科横断型の探究学習を行う科目で、学年団の多くの教員がかかわる。科目内で「ICCEモデル」を活用したことにより、その有効性が際立ち、教科指導での導入となった。探究科主任の前井野平先生はこう語る。

「「ICCEモデル」でこれまでの授業を整理すると、どのようを取り組みで、どういった教員能力を育もうとしているのかが見えてきました。学びの質に着目した授業設計は、汎用性が高く、全教科の共通言語になるのではないかと考え、教科指導でも活用することになりました」

そこで、18年度初めに全教員が参加する校内研修を実施し、改めて「ICCEモデル」の共通理解を図り、各

教科の状況に合わせて導入することとした。例えば、英語科では、定期考査後に「ICCEルーブリック」を取り入れた振り返りを行い、生徒が自身の理解度をメタ認知できるようにした。また、「数学Ⅰ」では、「ICCEモデル」を取り入れた授業を行い、前年度の取り組みに加え、単元の最後で自分で独立不等式の文章問題を作るパフォーマンス課題を行った。

「今年度は『文章を読んで独立不等式を作ることのできた』という生徒が、前年度の14%から45%に増加しました。生徒は深く考えることを経験し、1次不等式の単元の理解が進んだのだと思います」(田中先生)

今後は、個々の教育活動で回されているPDCAサイクルを連携させ、学校教育目標の達成のための大きなPDCAサイクルを構築することが課題だ。

「タロー・バープラン」(※5)「探究ナビ」(※6)「ICCEモデル」などを活用して教員間の共通理解が進んだ今こそ、さらに大きなPDCAサイクルを確立する好機だと捉えています。教材を超えて議論を加速させ、生徒の資質・能力の育成に焦点をあけた指導を追求したいと思えます」(酒井先生)

※1 ネットワークが構築する、知識・能力の3教科の基礎学力を測るテストと民間項目に置き換えることによって、学力と学習状況を調査するシステム。 ※2 基礎学力の達成をポートフォリオとして記録。振り返りができるシート形式。 ※3 カナダで開発された学習と評価のモデルのこと。4Eas(理解)、Connections(活用)、Extensions(発展)の3Cの段階で学びの質の改善を図る。